千年神の花嫁

一、神婚の儀

山深く奥まったその里には、千年ものあいだ人々に祀られてきた神がいた。

名を**瑞樹命**（みずきのみこと）という。

外見は年の頃十かそこらの少年。艶やかな黒髪を首の後ろでひとつに束ね、白絹の小袖をまとった姿は、どこかこの世ならぬ儚さを漂わせている。しかしその瞳には千年の刻を見つめてきた者だけが宿す深い光があり、身長はわずかに140cmほど。年の割に線の細い四肢は、ちょっとした風にも折れてしまいそうに見えた。

だが彼はまぎれもなく神だった。里の者たちは百年に一度、外の世界から嫁を迎え入れて瑞樹命に献上するしきたりを守り続けてきた。そして今回――通りかかった旅の女が、その生贄ならぬ花嫁に選ばれたのである。

「まあ……この私が、神様の花嫁に……？」

楠舞神夜は御簾の向こうにちらりと見える少年神の姿に、胸を高鳴らせていた。

里の長から話を聞いたとき、彼女は二つ返事で承諾した。路銀を稼ぐための売春で立ち寄った里だったが、まさか神の花嫁に選ばれるとは思ってもみなかった。しかも相手は千年を生きる神。未知なるおチンポ様との出会いに、神夜の秘所はすでにトロリと濡れ始めていた。

「感謝感激、極まりないです……♥」

神夜は婚礼衣装――里の女たちが心を込めて仕立てた白絹の打掛――をまとい、御簾の向こうへと進み出た。無論、下着は一切つけていない。乳房を抑えるのは打掛の柔らかな布地だけ。歩くたびに128cmの爆乳がタプン、ブルンと大きく波打ち、打掛の合わせ目からは**ぷっくりと盛り上がった乳輪が惜しげもなく覗いている**。

「……お前が、今度の嫁か」

少年神の声は、見た目よりもずっと落ち着いた響きを帯びていた。御簾が上がり、二人の視線が交わる。

瑞樹命は140cmの小さな体躯で、胡座をかいた膝の上に頬杖をつきながら神夜を見上げる格好になった。それでも神夜の方がむしろ気圧されるような、不思議な威厳が彼の周囲には漂っていた。

「はいっ。楠舞神夜と申します。本日より、瑞樹命様の花嫁としてお仕えいたします……どうぞ、末永くご寵愛くださいませ♥」

神夜が深々と頭を下げると、爆乳が重力に従ってズシリと垂れ下がり、打掛の合わせ目がさらに開いた。薄紅色の乳輪がほぼ全開でさらけ出され、先端の逞しい乳首までもがチラリと白昼に晒される。

瑞樹命の漆黒の瞳が、わずかに見開かれた。

「……お前、そなたの胸は……なんとも、妙な形をしているのだな」

「あら♥ 妙、ですか？」

「ああ。丸くて、大きくて、見たことのない生き物のようだ」

少年神は立ち上がると、無造作に神夜の打掛の合わせ目に手をかけた。その小さな手はまだ成人男性の半分ほどしかない。だが躊躇いなく衣を左右に開き、128cmの爆乳を完全に露わにさせた。

「まあっ……♥ 瑞樹様、いきなりお胸を……♥」

「嫌か？」

「いいえっ。むしろもっと見てくださいませ♥ 神様にこうして見初めていただいて、私、嬉しいこと極まりないです……♥」

神夜の碩大な双丘が、昼下がりの柔らかな光に照らし出される。128cmの質量は雪のように白く、それでいて内側からほのかな朱が透けるように血色を帯びている。幅広の乳輪は大人の拳ほどもあり、周囲の白い肌との境目がくっきりとわかるほどにぷっくりと隆起していた。先端の乳首はすでに固く勃起し、親指の先ほどの大きさに膨らんで、ツヤツヤと照り輝いている。

瑞樹命はしばらく無言でそれを見つめていた。千年のあいだ、彼は何人もの嫁を迎えてきた。しかしこれほどまでに異様な大きさの乳房を持つ女は初めてだった。

「触っても……よいか？」

その問いに、神夜は蕩けるような微笑みを浮かべた。

「もちろんです♥ むしろ触ってくださらないと、私のほうが悶えてしまいそうです……♥ さあどうぞ、瑞樹様♥」

二、爆乳への洗礼

少年神の両手が、ゆっくりと差し出された。

140cmの体躯にふさわしい小さな手のひら。指は細く、白く、爪は貝殻のような薄紅色に透き通っている。その手が、まずはおそるおそるといった様子で、神夜の左の乳房の膨らみに触れた。

「……ふわ、り……」

瑞樹命が息を漏らす。

128cmの乳房は彼の両手を優に超えていた。指を目一杯に広げても、乳輪の周囲すら覆いきれない。それほどまでに規格外の大きさだった。むにゅり、と指が沈むたびに、極上の羽根布団のような弾力が彼の小さな手を押し返す。

「なんという……柔らかさだ。それでいて、張りがあって……。まるで、水を詰めた絹袋のようではないか」

「あんっ……♥ 瑞樹様、そんなに褒められると、私まで照れてしまいます……♥」

神夜は顔をほんのりと朱に染めながらも、胸をさらに突き出すようにして少年神の手を受け入れていた。見知らぬ里の、しかも少年の姿をした神にこうして爆乳を好き勝手に弄られる——その状況自体が、彼女の被視姦嗜好と露出欲求をこれでもかと満たしていた。

太腿の内側を、とろりとした愛液が一筋伝い落ちる。

「んっ……♥ あぁ……♥ 瑞樹様の御手が、私のおっぱいに沈んで……♥ 嬉しい、嬉しいですぅ……♥」

「この、先端の……なんというか、尖った部分は」

「あっ♥ それは乳首です♥ 私の……淫らな乳首……♥」

瑞樹命は右手の親指と人差し指で、神夜の左の乳首をつまんだ。くりっ、と軽くひねる。

「ひぅんっっ♥♥」

神夜の全身がビクンと跳ねた。逞しく肥大した乳首は、少年神の小さな指でも容易に摘めるほど突出している。彼はまるで新しい玩具を弄ぶ子供のように、くりくりと乳首を転がし、時にぎゅっと押し潰し、時に引っ張りあげた。

「ほう……ここを弄ると、そなたは面白い声を出すのだな」

「あっ、あぁんっ、やっ、そこばかりぃ……♥ 私の乳首、感じすぎちゃって……あぁあっ♥♥」

瑞樹命の顔に、少年らしい無邪気な笑みが浮かんだ。千年の神とはいえ、その好奇心は見た目相応に純粋だった。しかし同時に、そこには確かな加虐の色も混ざっている。彼は神夜の苦悶とも愉悦ともつかない反応を、じっくりと観察しながら乳首を弄び続けた。

「そなたの胸は、本当に面白い。これほど大きいのに、こんな小さな先端だけでそんなに感じるのか」

「だってぇ……♥ 乳首は私の性感帯で……あんっ、あっ、ひぁっ♥ 瑞樹様、もっと、もっと虐めてくださいぃ……♥」

「虐めてほしいのか？」

「はいっ♥ 私の淫らな乳首、瑞樹様の思うままに……♥ 好きなようにしてくださいませ……♥」

少年神の黒い瞳が、一瞬ギラリと光った気がした。

彼は両手を神夜の両方の乳首に同時にかけ、今度は遠慮会釈なく、ぎゅうううううっっ、と握り潰した。

「んぁあああああっっ♥♥♥」

神夜の膝がガクガクと震え、思わずその場に崩れ落ちそうになる。しかし彼女はかろうじてこらえ、爆乳をさらに少年神の顔の高さへと差し出した。身長差ゆえに、立ったままの神夜の乳首は140cmの瑞樹命の目の前に位置していた。

「あああっ……♥ 乳首が潰れて……♥ でも気持ちいい、気持ちいいですぅ……♥♥」

「ふむ。そなたはどうやら、痛いのも好きなのだな」

「はいぃ……♥ 瑞樹様にいじめられると、子宮がきゅんきゅん疼いて……あぁ、おまんこもトロトロに濡れてきちゃいました……♥」

「おまんこ……とは？」

「あ♥ 私の……女の部分です♥ どうぞ、こちらも見てくださいませ……♥」

神夜は自ら打掛の裾をたくし上げ、股間を露わにした。

そこには無毛のパイパンがひっそりと息づいていた。産まれつきムダ毛の一切生えない、白い白い秘所。大陰唇はぷっくりと柔らかな膨らみを作り、その中心からは透明な愛液がとろりと溢れ出ている。肉ビラはまだ完全に開ききっておらず、しかし隙間からは熱気を帯びた牝の匂いが立ち上っていた。

瑞樹命はしゃがみ込み、間近からその秘所をまじまじと凝視した。

「……ここにも、毛がないのだな」

「はい♥ 私は生まれつき、ムダ毛が一切なくて……。陰毛も、腋毛も、生えたことがなくて……。だからいつでもこんなふうにつるつるなんです♥」

「不思議な女だ。まるで子供のようでありながら、この部分だけは異様に熟れている」

少年神の小さな指が、神夜の肉ビラのあいだをぬるりと這った。

「ひゃぅっ♥♥」

「濡れている。それも、ただごとではないほどに」

瑞樹命は指についた愛液を持ち上げ、陽の光に透かした。透明で粘り気のある液体は、銀の糸を引いてとろりと垂れる。彼はそれを無言で口元に運び、ペロリと舐めた。

「……少し、しょっぱい。そして、甘い匂いがする」

「ああっ……♥ 神様に私の愛蜜を味わっていただけるなんて……感激極まりないです……♥」

「子宮というのは、この奥にあるのか？」

瑞樹命は立ち上がると、今度は神夜の下腹部に手のひらを当てた。へそのやや下あたりをぐっと押す。

「ひぅんっ♥ そこ、子宮……あぁっ♥ 押さないでくださ……あ、でも気持ちいい……♥」

「ふむ。ここを突かれると、そなたは孕むのか」

「はいぃ……♥ 私は特異体質で、すぐに孕んでしまうんです……♥ 瑞樹様の御子を、私の子宮で育てられたなら……あぁ、考えただけでゾクゾクしてきちゃいました……♥」

三、神の饗宴

「よし」

瑞樹命はあっさりと言うと、自らの小袖の帯を解いた。

白絹の衣がハラリと床に落ちる。露わになった少年の裸体は、やはり年の割に細く、白く、しかしその股間にはーー140cmの体躯に不釣り合いなほどの**剛直**がそそり立っていた。

無毛の陰部から屹立するそれは、長さこそ成人男性に及ばないものの、太さと硬度においてはむしろ勝っていた。赤黒く充血した亀頭は、少年の拳ほどの大きさに膨らみ、先端からはすでに透明な先走りの露が滴っている。

「まあ……っ♥♥♥」

神夜は思わず息を呑み、その場に膝をついた。

自然と手が伸び、両手でそっと陰茎を包み込む。彼女の大きな手の中でも、それは熱く脈打ち、今にも暴れ出しそうなほどの生命力を湛えていた。

「なんて立派なおチンポ様……♥♥♥ 神様のおチンポ様……触らせていただけて、私、私……ああ、言葉になりません……♥♥♥」

「おチンポ様……か。面白い呼び名をする」

「はい♥ 男性器は全て、私にとって崇拝すべきおチンポ様です。でも、神様のおチンポ様は格別です……。この匂い、この熱さ、この脈打ち……ああ、もう……♥」

神夜はそう言うと、顔を近づけ、まずはその亀頭に唇でそっと口づけた。ちゅっ……と小さな音が立ち、先走りが彼女の唇を濡らす。

「んっ……♥ 瑞樹様のおチンポ様のお味……ちょっとしょっぱくて、でも甘くて……あぁ、美味しい……♥」

彼女は亀頭を口に含み、舌でやわやわと愛撫し始めた。鈴口をチロチロと舐め上げ、カリの裏側に舌先をねじ込み、強く吸い上げる。

「んぷっ……♥ ちゅぱっ……れろぉ……♥ おチンポ様……おチンポ様ぁ……♥ もっと美味しくしてくださいませ……♥」

瑞樹命は無言で神夜の頭を見下ろしていた。千年の生涯で何人もの女が彼に仕えてきた。しかしこれほど熱心に、これほどの崇拝の念を込めて彼の陰茎に奉仕した者はいない。

「……そなたは、本当にそれが好きなのだな」

「はいぃ♥ おチンポ様に奉仕することほど、私を幸福にしてくれるものはありません……♥ あぁ、口の中がおチンポ様でいっぱい……♥ んっ、じゅるるる……♥♥」

神夜は唾液をたっぷりと絡めて陰茎全体をしごき上げ、時には喉の奥まで咥え込んで瑞樹命の反応を窺った。彼女の口淫は丹念で、かつ淫猥だった。まるでそれ自体が一つの儀式であるかのように、彼女は少年神の男根を愛おしみ、舐め、吸い、扱き続けた。

「んぅっ……♥ おチンポ様がピクピク言ってる……♥ もしかして、イきそうですか……？ どうぞ、私のお口に御神酒を注いでくださいませ……♥」

「……いや」

瑞樹命は静かに言った。

「今日は、そなたの子宮に注ぐ。それが嫁としての最初の勤めだろう」

神夜の目が歓喜に輝いた。

「ああっ……♥ 神様の御神酒を、直接子宮に……♥ 嬉しい、嬉しすぎますぅ……♥ どうぞ、どうぞ思うままに……♥」

四、身長差の交合

瑞樹命は、神夜を床に横たえさせた。

140cmの彼が128cmの爆乳を持つ女に覆いかぶさる格好は、傍目にはどこかアンバランスに見えたかもしれない。しかし当の二人にそんなことを気にする様子は微塵もなかった。

彼はまず、神夜の爆乳のあいだに自分の身体を埋めるようにしてうつ伏せになった。むにゅううう……と両側から128cmの双丘が彼の小さな体を包み込み、その柔らかさと温もりに全身が埋もれる。

「……気持ちがいい」

少年神がぽつりと漏らした言葉に、神夜は破顔した。

「ああっ……♥ 瑞樹様が、私のおっぱいに埋もれて……まるで私が瑞樹様を抱きしめているみたい……♥ 嬉しいこと極まりないです……♥」

「そなたの胸は、まるで極上の褥だ。ここで眠ったら、さぞ気持ちがよかろうな」

「はいっ♥ いつでも私のおっぱい、瑞樹様のために使ってくださいませ♥ 枕でも、褥でも、なんなら……その、おチンポ様の奉仕台でも……♥」

瑞樹命はしばらく爆乳の感触を味わった後、ゆっくりと体を起こした。そして神夜の両脚を開かせ、無毛の秘所へと身を寄せる。

「では、いくぞ」

「はい……♥ どうぞ、お納めくださいませ……♥」

瑞樹命は自分の陰茎を手で支え、神夜の膣口に亀頭をあてがった。とろりと溢れ出る愛液が、すでに彼の先端を濡らしている。ぬぷぷ……と、亀頭が肉ビラを押し広げながら沈み込む。

「んぁあああっ♥♥♥」

神夜の背中が弓なりに反り返った。

少年のそれをくわえ込んだ膣は、今までにないほどの切なさと悦びに震えている。何しろ相手は神だ。千年を生き、里の者たちから崇められる存在。そのおチンポ様が今、自分の膣内をゆっくりと進んでいるーーその事実だけで、神夜は絶頂に達しそうだった。

「あ、あぁっ……♥ 瑞樹様のおチンポ様が、私のなかで……♥ 子宮のすぐそばまで来てる……♥ はぁぁぁっ……♥」

「……そなたの中は、ひどく熱いな。そして、うごめいている」

「私のおまんこ、おチンポ様が大好きで……自然に締め付けちゃうんですぅ……♥ あっ、あんっ、奥まで来たらもっと締まっちゃいますぅ……♥」

瑞樹命はゆっくりと腰を動かし始めた。長さこそ常人より短いぶん、彼は子宮口を直接ノックするようにしてピストン運動を行うことができた。小さな体全体で体重をかけて、トントントン、と子宮の入り口を叩く。

「ひぅっ♥ あっ♥ そこっ♥ 子宮のくちっ♥ ノックされてるぅ♥♥」

「ここが子宮か。固いが、柔らかくもある。不思議な感触だ」

「ああっ、そんなこと言いながら突かれたら……あぅっ、おかしくなっちゃいますぅ……♥♥♥」

そのときーーぐにゅり、と。

子宮口が、亀頭を受け入れた。

「んあああああああああっっ♥♥♥♥」

神夜の全身が激しく痙攣した。子宮にまで達した陰茎は、彼女の最も深い部分を容赦なくえぐる。1000年生きた少年神は、その小さな体で彼女の胎をこじ開け、奥の奥まで蹂躙していた。

「ああ、子宮に入ってる……♥ 神様のおチンポ様が、私の子宮にズボズボ入ってる……♥ 孕む、これ絶対孕んじゃう……♥♥♥」

「ならば孕め。それが嫁の勤めだ」

瑞樹命は静かに、しかし断固として腰を動かし続けた。140cmの小さな身体をぴったりと神夜の股間に密着させ、ズン、ズン、と子宮を穿つ。そのたびに128cmの爆乳が激しく揺れ、ぶるんぶるんと波打った。

彼はふと手を伸ばし、その揺れる爆乳を両手で鷲掴みにした。指が沈む。それでもまだ、彼の小さな手は乳房の半分も覆えない。

「これほど大きくても、そなたの乳は形が崩れないのだな」

「あぁんっ♥ 私は何度孕んでも、何度産んでも、プロポーションが崩れないんですぅ……♥ だから瑞樹様がいっぱい孕ませても、私はずっとこのまま……♥ 半永久的に、瑞樹様の好きなおっぱいのままでいられます……♥♥」

「ほう……それは都合がいい」

少年神の口元が、ほんの少しだけ緩んだ。

彼はそれから、夢中になって神夜の爆乳を揉みしだきながら腰を使い続けた。むにゅむにゅと形を変える128cmの双丘。その中心で硬くそそり立つ乳首を、彼は時折ぎゅっと摘み上げる。

「ひぁんっ♥ 乳首と子宮、同時にきちゃう……♥ だめ、だめぇ、イく、イっちゃいますぅ……♥♥♥」

「構わん。好きなだけイくといい」

「あああっ、じゃあ遠慮なく……イグッ、イグイグイグゥゥゥッッ♥♥♥♥ おチンポ様で子宮突かれて、おっぱい揉まれて、イかされるぅぅぅっっ♥♥♥ 極まり、極まりないですぅぅぅぅぅっっ♥♥♥♥」

神夜の膣が激しく収縮し、瑞樹命の陰茎を締め上げた。その刺激に耐えかねて、少年神もまた、低く呻いた。

「……っ、出すぞ」

「はいっ♥ どうぞどうぞぉっ♥ 子宮に、子宮に御神酒くださいませぇっ♥♥♥」

どくんっ。

どくどくどくどくっっ。

千年の神の精が、神夜の子宮の奥深くへと注ぎ込まれた。熱く、濃く、とめどなく。彼女の胎内はあっという間に白濁に満たされ、下腹部がほんのりと膨らむほどだった。

「あああぁぁぁ……♥♥♥ 神様の御神酒が……子宮でドクドクしてる……♥ 熱い……幸せ……♥♥ これで私、神様の子を孕みます……♥ 感激、極まりないです……♥♥♥」

神夜は涙を流し、しかしそれは苦痛の涙ではなかった。歓喜と感謝と、深い悦びの涙だった。

五、苗床の悦び

その後、何度交わったかはわからない。

瑞樹命は気の向くままに神夜の身体を弄び、飽きてはまた思い出したようにまぐわった。午後の陽射しが傾き、夜の帳が下りても、二人の交情は途切れることがなかった。

神夜の爆乳は、少年神の独占的な玩具となった。彼はその柔らかさに頬を寄せ、寝そべり、時に乳首をしゃぶって母乳をねだるように吸い上げた（神夜の特異体質は、妊娠が確定した瞬間から母乳の分泌を開始させた）。

「んっ……♥ 瑞樹様、いっぱい飲んでくださいませ……♥ 私のおっぱいのお乳、全部瑞樹様のものですから……♥」

「甘い。そなたの乳は甘いな」

「あぁ……♥ 神様に美味しいって言っていただけて、私、もう……♥」

彼女の母乳を味わい、無毛の秘所に指を這わせ、時にはその指で乳首を弾き、また時にはーー彼の神としての力で、神夜の感度を何倍にも高めてからゆっくりと陵辱した。

「ひあああああっっっ♥♥♥♥ なにこれ、なにこれぇっ♥♥♥ 乳首が、乳首がぁ、クリよりも感じちゃってるぅぅっ♥♥♥」

「ちょっとした神気を流してみただけだ。どうやらそなたの体は、これに過敏に反応するらしい」

「あああっ、それじゃあ私、もう狂っちゃいますぅ……♥ 瑞樹様にずっとおっぱい弄られてるだけでイかされちゃう……♥ それなのに子宮も欲しくてたまらなくて……ああっ、おチンポ様、おチンポ様くださいませぇ……♥♥♥」

神夜の願いに応えて、瑞樹命は何度でも彼女の中に精を注いだ。

三日目の朝には、神夜の腹はわずかに膨らみ始めていた。特異体質による超短期的な妊娠ーー胎児は通常の何十倍もの速度で成長し、すでに子宮の中で息づいている。

「ああ……♥ 瑞樹様の御子が、私のお腹の中で育ってる……♥ こんなに早く母になれるなんて……感激極まりないです……♥」

「そなたの体は本当に不思議だな。昨日まで平らだった腹が、もうこんなに膨れている」

瑞樹命は神夜の腹に耳を当て、中の気配を探った。小さな命が、確かにそこに宿っている。

「何度でも孕ませてやる。そなたが望むなら、何人でも」

「はい……♥ 私は瑞樹様の苗床です……♥ 何度でも孕み、何度でも産みます……♥ それが神様の花嫁としての、私の幸せですから……♥♥」

彼女は微笑みながら、140cmの少年神をぎゅっと抱きしめた。柔らかく大きな胸に彼を埋もれさせ、まるで我が子をあやすように、あるいは最愛の夫を慈しむように。

「……そなたは、里を出て行ったりはしないのか」

ぽつりと、瑞樹命が尋ねた。

「これまでの嫁たちは、みな私に飽きて去っていった。あるいは歳を取り、老いを恥じて隠遁した。私だけが変わらず、ここに残った」

神夜は静かに首を振った。

「私は去りません♥ 私は半永久的に若いままです。何度孕んでも、何度産んでも、この通り、瑞樹様の好きなおっぱいも、つるつるのおまんこも、ずっとこのまま♥」

彼女はそっと少年神の頬に手を当て、目を細めた。

「それに……私は、飽きることなんてありません。だって瑞樹様は、こんなに可愛らしい顔で、私のおっぱいをむにゅむにゅ揉みながら、夜が明けるまでおチンポ様で子宮を突き続けてくださるんですもの……♥ そんな幸せ、手放すわけがありません♥」

「……そなたは、変わった女だな」

「よく言われます♥ でも、それは褒め言葉だと思っています♥」

瑞樹命はそれ以上何も言わず、ただそっと、神夜の爆乳に頬を寄せた。

その表情は、1000年の孤独を知る老成した神のものだった。しかし同時に、初めて心から信じられる伴侶を得た、あどけない少年の顔でもあった。

六、神嫁の未来

それから一年が過ぎた。

神夜はそのあいだに三度の妊娠と出産を繰り返した。産まれた子はみな瑞樹命と同じ神性を宿し、生後数日で里の社へと預けられ、そこで里人たちの手によって大切に育てられている。

出産を終えたばかりの神夜は、今日もまた五度目の妊娠の兆候を感じながら、縁側で身体を横たえていた。

「……また孕んだのか」

「はい♥ 瑞樹様が、昨日の晩もあんなにいっぱい子宮に注いでくださいましたから……♥ あぁ、お腹がまた大きくなるのが楽しみです……♥」

少年神は無言で神夜の腹に手を当てた。まだ膨らんではいないが、確かにそこには小さな生命の気配が宿っている。

「……そなたと出会ってから、里は活気づいた」

「まあ♥ それは嬉しいことです」

「みな、そなたを『女神様』と呼んでいるぞ」

神夜はくすりと笑った。

「私は神様の花嫁ですから……せいぜい女神の一歩手前、『女神の卵』くらいでしょうか♥」

「卵はもうとっくに孵っている」

そう言って、瑞樹命は神夜の爆乳をぽふりと叩いた。ぶるんっ、と128cmの双丘が大きく揺れる。

「あんっ……♥ もう、瑞樹様ってば、昼間から……♥」

「嫌か？」

「嫌なわけないじゃないですか♥ むしろもっと……♥」

神夜は自分から打掛の合わせを開き、爆乳と乳輪と、そしてすでに先端を濡らし始めている乳首をあらわにした。母乳がじわりと滲み、白い雫がぷっくりとした乳輪の上を伝い落ちる。

瑞樹命はそれを指ですくって舐め、それからいつものように、彼女の爆乳に顔を埋めた。

「これからも、ずっとだ」

「……はい♥」

「そなたが老いることも、飽きることもないというなら……千年でも二千年でも、私のそばにいるがいい」

神夜の瞳が大きく見開かれ、それからとろけるように細められた。

「……瑞樹様。それは、永遠の愛の誓いと受け取ってもよろしいのでしょうか♥」

「好きに受け取れ」

「ああ……っ♥ 感激極まりないです……♥♥♥ 私、楠舞神夜、これからもずっとずっと、瑞樹様の花嫁であり苗床であり、おっぱい玩具であり続けます……♥ 千年でも、二千年でも、永遠でも……♥♥♥」

彼女は少年神の小さな身体を抱きしめ、その髪に顔を寄せた。

里の春は長く、桜はいつまでも散らなかった。

そして神の社からは今日もーー「あんっ♥ 瑞樹様、乳首そんなに引っ張らないでぇ……♥」「うるさい。これは私の乳首だ」「ああっ♥ そうでした、私のおっぱいも乳首もおまんこも子宮も、全部瑞樹様のもの……あぁあっ♥ 嬉しいこと極まりないですぅ……♥♥♥」ーーそんな睦言が、いつまでも途切れることなく響い

ていた。

了